

南区の東海豪雨被害と天白川改修事業について

天白川は、昭和 45 年 7 月の名古屋南東部局地豪雨、46 年 8 月の台風 23 号でも、沿岸で大きな浸水被害を受けており、昭和 48 年から、下流から上流へと改修工事がおこなわれてきました。

平成元年からは、大慶橋（南区）から平子橋（緑区）区間の改修工事に着手し、少しでも多くの水を流すための河道拡張を目指して、引堤用地の確保を進めつつ、名鉄本線橋梁の改築や、支流扇川の河床掘削などをおこなっていました。

江戸時代の天白川河道付け替え（享保 3 年の山崎川への『瀬違い』）を、度重なる洪水のため元の川筋に戻した時は、天白川の新田住民は道德新田に「御替地」されたそうですが、現代では、かつては田畑だった川沿いは市街地となり、マンションも立ち、用地確保は簡単ではありませんでした。

そんな中、平成 3 年 9 月には、台風 18 号と秋雨前線の影響で、天白区野並や扇川合流点付近を中心に浸水被害が発生。そして、平成 12 年 9 月 11 日から 12 日にかけて、未曾有の都市型豪雨である「東海豪雨」が名古屋を襲い、伊勢湾台風以来の大きな浸水被害をもたらします。

二級河川天白川は、愛知県の管理する川です。天白川流域では、緑観測所で 2 日間の総雨量 647 mm、鳴海観測所で 618 mm、天白観測所で 585mm を記録、被害は、床上浸水 3,800 戸、床下浸水 4,400 戸に及びました。

当時、愛知県建設部河川課職員であった方のお話では、職員が夜通し詰めて監視していた各河川の水位観測所のモニターが、青から、次々に警戒水位越えを表す赤信号に変わり、その様子は今まで見たこともなく、尋常でなかったといいます。

沿岸では、天白区野並における名古屋市上下水道局野並ポンプ所の冠水故障、地下鉄桜通線野並駅浸水等の被害が大きく伝えられましたが、南区においても、右岸の芝町（笠東学区）で越水。床上浸水 1,939 戸、床下浸水 3,438 戸の被害は、数だけで見れば左岸（天白区、緑区）を上回っています。

その後、東海豪雨は国の「激甚災害」に指定され、天白川の改修工事は再度被害防止のための「河川激甚災害対策特別緊急事業」（通称「激特」）の対象となります。

平成 12 年から 16 年まで、5 年間と期限を限られた事業期間の中で、長く続けられてきた用地確保事業を礎に、弥富ポンプ所上流までの約 4 km にわたる「引堤」による河道の拡幅を実現。併せて、約 8km にわたり河床を平均 2.5m 掘り下げ、流量を大きくアップし、天井川状態を改善。洪水時の水位は約 3m 下がり、越水・氾濫の危険が少なくなりました。また、堤防決壊を防ぐため、最新工法を利用した堤防強化が図られました。その他、大慶橋等 4 橋の改修、笠寺ポンプ所等の放流渠改築、環境対策のための魚道の設置等が行われました。

参考文献：

「河川激甚災害対策特別緊急事業二級河川天白川工事記録誌」（愛知県、平成 18 年 9 月、愛知県図書館所蔵あり、貸出禁止）

「東海豪雨水害に関する記録」（名古屋市、平成 13 年 3 月、1009911023834）

※この稿の作成にあたり、元愛知県建設部河川課職員の方に、改修事業に関するお話と資料提供をいただきました。心より感謝申し上げます。

作成：名古屋市南図書館伊勢湾台風資料室 令和 2 年 8 月 30 日